

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

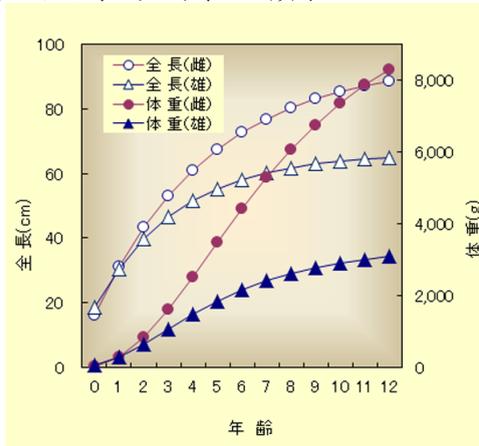
系群名 日本海西部・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

- 寿命: 12歳
- 成熟開始年齢: 2歳(50%)、3歳(100%)
- 産卵期・産卵場: 冬～春季(1～4月)、南ほど早い
- 索餌期・索餌場: 周年、沿岸域
- 食性: 稚魚は小型甲殻類(主にアミ類)、未成魚以降は魚類(イカナゴ、カタクチイワシなど)、エビ類、イカ類など
- 捕食者: 着底期に同種のヒラメ、アイナメ、ホウボウ、ハゼ類等

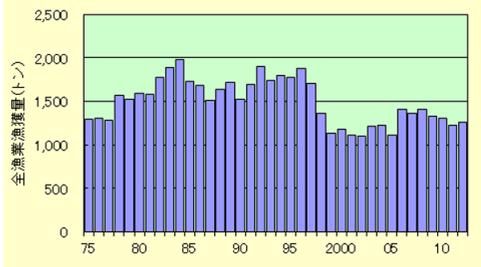


漁業の特徴

本種は沿岸域において刺し網、小型底びき網、沖合底びき網、釣り・延縄、定置網など様々な漁法により漁獲されている。系群全体での漁業種類別漁獲量では刺し網による漁獲が最も多く、次いで小型底びき網、沖合底びき網の順である。本系群では1980年代から事業規模での種苗放流が行われている。近年の放流尾数は減少し、1999年には約560万尾であったものが2011年には約400万尾となっている。

漁獲の動向

本系群の漁獲量は1984年に1,982トン記録した後、1,500～1,900トンを維持していたが2002年には1,103トンと減少した。その後、漁獲量は緩やかに増加して、2012年の漁獲量は1,259トンになっている。2012年の県別漁獲量は長崎県、熊本県、福岡県の順に多い。現在の漁獲物は大型魚が主体である。ヒラメを漁獲する主な沿岸漁業の漁労体数は減少している。

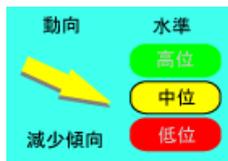


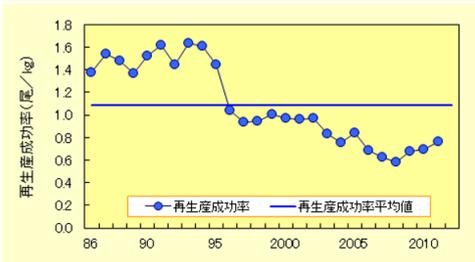
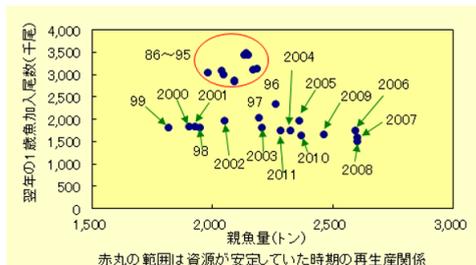
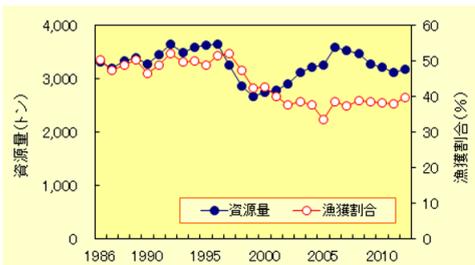
資源評価法

漁業種類別の年齢別漁獲尾数を合計し、系群全体の漁獲尾数を求めコホート解析を行った。小型魚の保護が行われていることから、1歳魚以上を解析に用いた。自然死亡係数は0.208とし、最近年のFの値は過去3年間の同年齢魚のFの平均値とした。親魚量の下限值(Blimit)は、加入量の上位10%(R-High)と再生産成功率の上位10%(RPS-High)の交点となる親魚量(2,144トン)として設定した。

資源状態

本系群ヒラメの資源量は1997年頃から急減し、1999年に2,672トンまで減少した。その後資源量は回復して2006年に3,599トンのピークを迎えた。2012年の推定資源量は3,174トンとなった。現在の資源水準は中位、動向は減少と判断した。2000年以降は1990年代と比較して漁獲割合が低くなっている。1996年以降再生産成功率が低下し、現在はやや回復傾向を示している。2012年の漁獲係数は0.57で、資源量の維持を目標とした限界値(Fsus:0.57)と同等であるが、加入あたりの漁獲量を最大とするF(Fmax:0.32)より大きい。このため、成長乱獲にあると判断される。





管理方策

本系群のヒラメでは1996年から再生産成功率が低下し加入状況が悪化したため資源量が減少したと考えられる。近年の親魚量は B_{limit} (2,144トン)より高い水準を維持しているが、再生産成功率が低水準である。2012年の漁獲係数 F (0.57)は、資源を維持する漁獲係数 F_{sus} (0.57)と同等であるため F_{sus} の漁獲量を ABC_{limit} 、不確実性を見込んで $0.8F_{sus}$ (0.45)で漁獲した場合の漁獲量を ABC_{target} とした。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABC_{limit}	1,260トン	F_{sus}	0.57	39%
ABC_{target}	1,065トン	$0.8 \cdot F_{sus}$	0.45	33%

- ABCの値は1の位を四捨五入
- ABCには0歳魚は含まれない
- F値は各年齢の平均値

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少
- 現在の漁獲は成長乱獲
- 1990年代半ばの資源減少は再生産成功率の低下による
- 2011年の再生産成功率は低水準であるが回復傾向を示している
- 親魚量は維持されている

管理方策のまとめ

- 親魚量の維持
- 小型魚の保護
- 加入動向の把握(種苗放流も含め)が必要

執筆者: 中川雅弘・鈴木健吾・吉村 拓

資源評価は毎年更新されます。